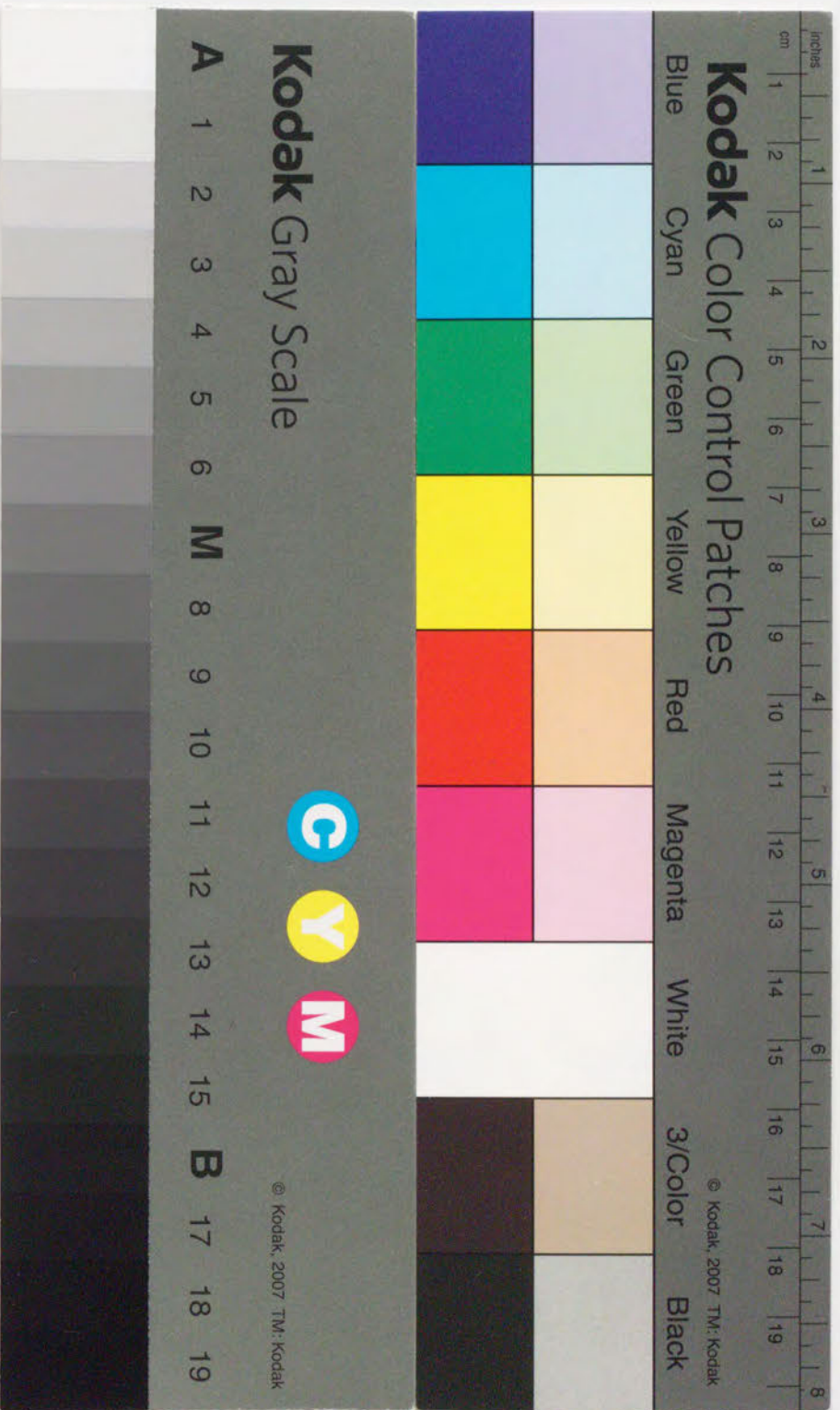






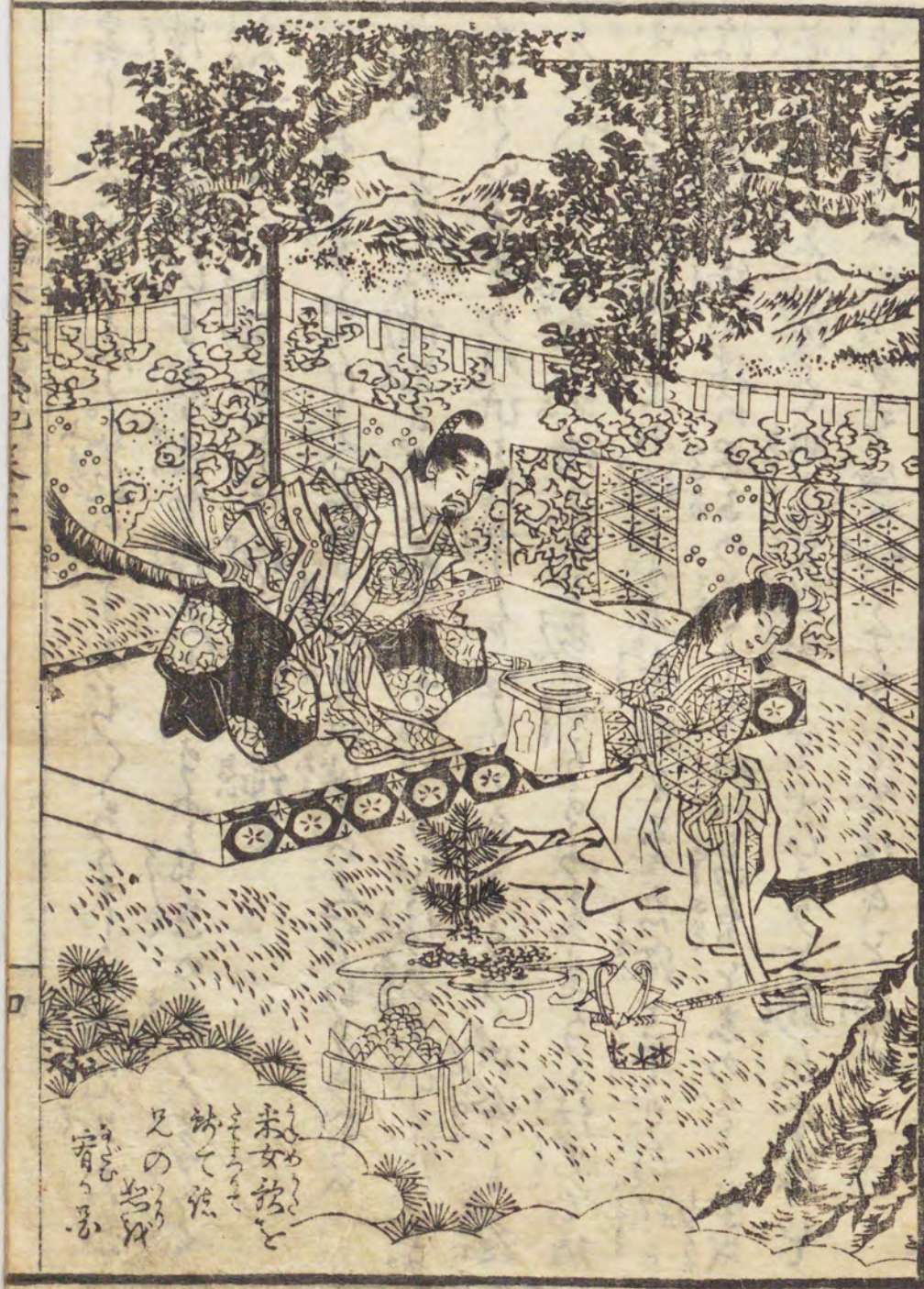
徳田
蔵
印

連水春曉齊画

繪本えほん堪かん忍にん記き

順應堂







實方館長
乃祖神の
崇と
あや



くの人をさう越え大納言小任じをさし。実方お辰が年
忽と恐ませをまひて。出仕代やど先きも。枕をてとま
て東國小遠でたまふ。のち夷民並崎土組神の前をるよて
海りさふと死。里人あまこちおやめーをまふ。少神おし
下馬さうーさう座しと告とと。いふゆる神をや。あひま
るさう。少神なりとやと。さてい卑者の神なりとバ下
馬ふかよつどとて。あまこちひらう。神の少神や。果して
あまこちありて遠さ。陰奥の土となりまふひぬ。さまじと一
般。お小神活。おのうれ文ををきまやと思へう。その魂の
雀とかりて。禁中の臺盤新ふらひきさう。菜を啄もろ。是
をへ肉雀と俗傳を。皆時のいりを。悲びさまこち実方お辰の



と蛇蝎の刺と秘し。姐己とやふて衆し。西伯侯紂王の
 を然て傳せども。却て西伯を羨望し。固より七年。又西伯
 が子伯邑考と斬て肉割る。又の西伯小腸。而伯嚭め家子肉割る
 と知る。我を食する半を衆し。眼を悪んで食を食く
 ら。紂王は伯邑考を笑ひ。何有る。而伯を衆人なり。や。我子の肉
 を食く。知る。慢り免して。政刑小帰る。而を衆人。而伯を
 恨む。て衆を衆し。又と。紂王の衆を衆し。衆を衆し。百姓
 恨み。法度叛て。衆文王。而伯を衆し。衆を衆し。衆を衆し。
 まい。衆い。よく。衆く。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。
 子武王。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。
 う。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。衆を衆し。



石井政家門
義家

馬と
義家

九

馬とぞめてあふをへりけむばる丹う志とてさぐり明徳元年山名
隆興守式清京初に執入内中そ合戦のたれも丹丸國までたりし
を後宗小太郎をまきこりて勢とあひ討死し丹とすし以恩と報せし
○源二位頼朝郷の源義朝よりなり父義朝は平治元年平清盛小
貳員尾張の世方の内訌とて長田庄目があら戦られ斬り殺され
兵衛佐と時十郎承和をたづみ美濃國不破関とて擣となり改め付えろ
くと池邊なる處を蒙りて伊豆小宮ふ源氏一族とて比原親七郎等
代官んと病よきの動靜を伺ひるふ安は伊豆國の住人伊藤祐親入道
女史ありその子三の女とて備前府ありいひ男子二人を収てあると千鶴丸
や号し伊藤のあゝ痛ふとぞゆほじげ思ふ方のもね祐親入道初よりい
児を見付あはれ者の子めとてなまむ傷と事いうわじてを備前府あり

伊賀
 忍術
 秘傳
 卷之
 一
 伊賀
 忍術
 秘傳
 卷之
 一

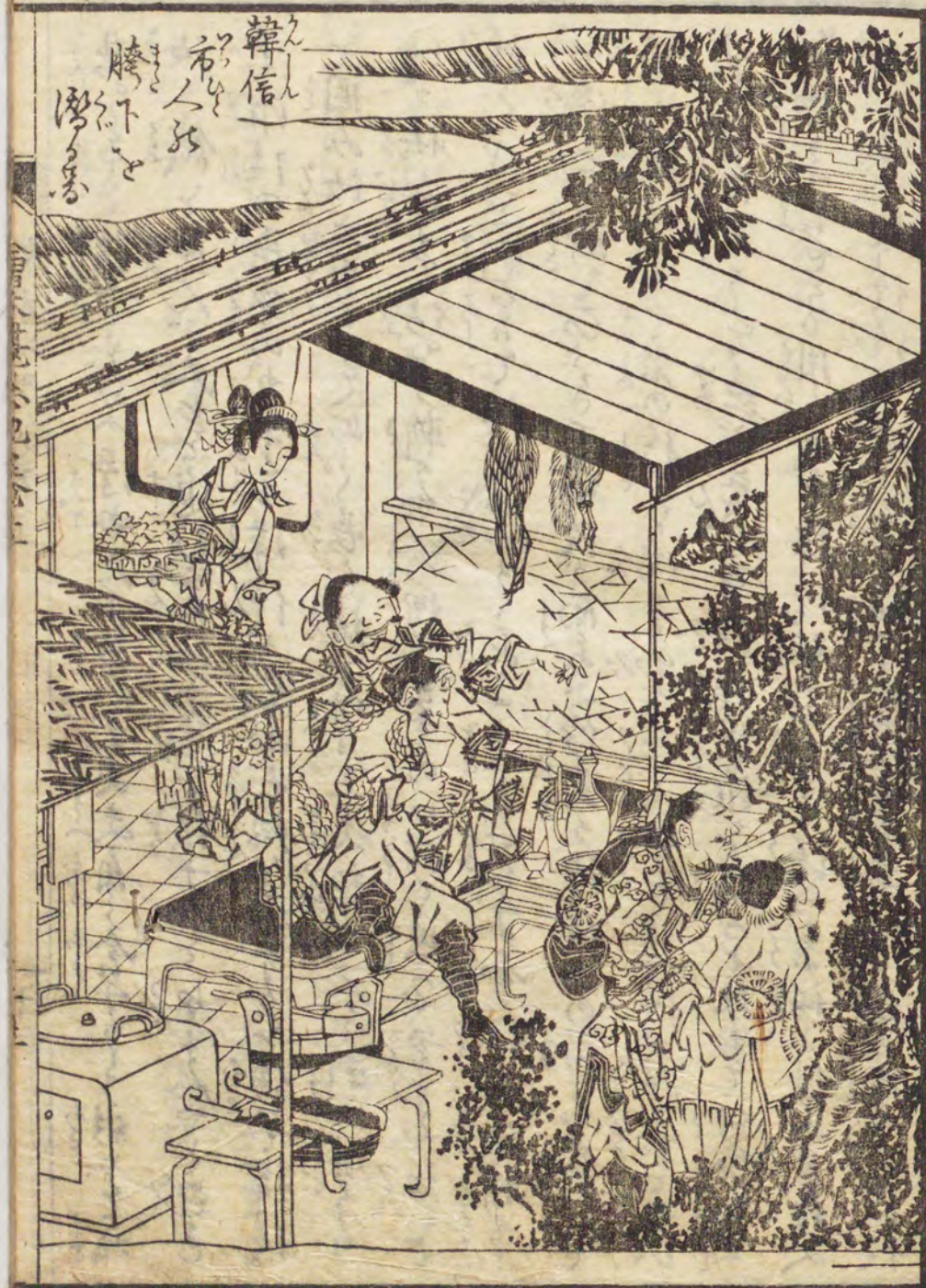
會大甚忍也

十



伊賀忍術秘傳

十



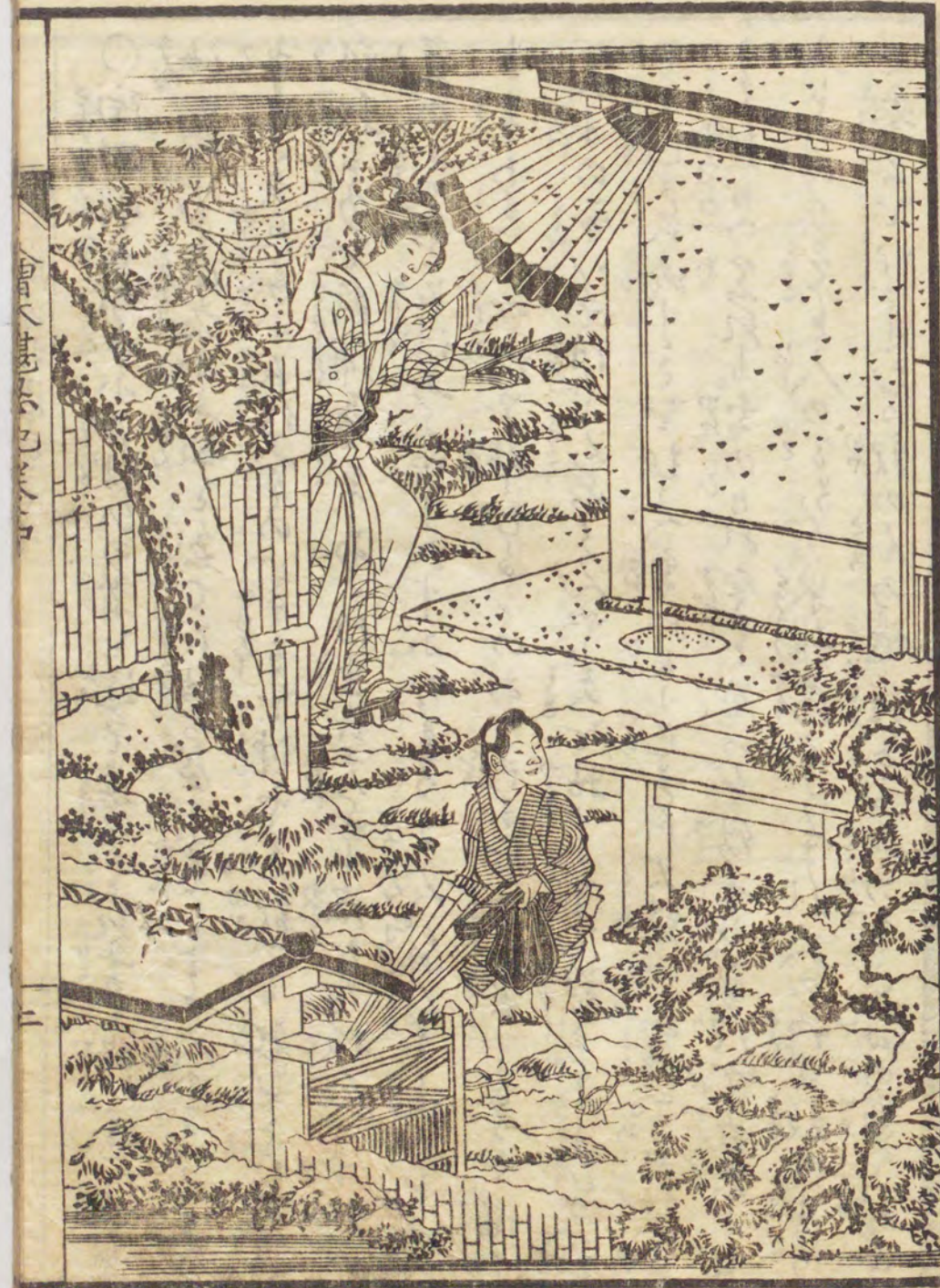
給本坊忍詔判



○今也上人を佛の土へ送りて感され六波羅の唐をわく入京の
橋を通りひいてはるる男を大勢橋の上をさるるをきき見うけ
昨の銭のえとあるは多しとて破れたる馬の背まで上人の衣を
あてふふ撒らわつひり例より杖を振立て叩き仰ぐお教世路確
まゝやと云うはるるをきき見うけて近き幕ふゆりうひんを傳りうひり銭の
以てあるをきき見うけはるるをきき見うけはるるをきき見うけはるるを
橋を人よえんぐよおとつとて御を腹のふりまされもけまされ
果然せりと云うはるるをきき見うけはるるをきき見うけはるるを

○釋尊の御子羅睺羅を若かり十太君の中へと忠告せし一の
そ若かりわたり極く腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
睺羅と呼んで細き水をかきえを流しゆえのぬく短き

今もも富ひて一皮翻るる水のいそえの盤もあまきやや
も入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
水も地も翻りてうみひもあまきややも入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
うみと戒めをわひて羅睺羅なるゆえにうみ親の衣を脱ぎ
あひぬ一時わたりもあまきややも入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
彼堅羅門なるうみ羅睺羅を捕へてあまきややも入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
血流もあまきややも入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
ひ我佛の教を信じて痛を忍び眼をさるるをきき見うけはるるをきき見うけはるるを
半分のぬくやも入ひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅
忍も大人をきき見うけはるるをきき見うけはるるをきき見うけはるるを
捨ててひいそえきばはるる腹無く短き短き若かりと有りしうみ親を羅



奴僕
を
つ
る
居

水城記巻中

○陶淵明がふ小石はひの者と遠くを去るを
汝がふとけ者小ふ般と忽て石はる。そを
おまゝうん家ふはふものいをもを伸やと
新れもの石を浦を辛あふ車へたふ。後なり
衆の小児と石はる。甲ふすふなる人。あふ
き車あふお縛り登むるものあふ己まが年
父才の老いそはる。人や。父と拙しやて
目ふ己まが冷しさをむる。おは月小己ま
うそ烈日の照れも。おのれを厭ふ。おは
ふものあり。そと人のふあり。果敢てく
て奉ふとけ。むる親の心。健健も又わく
父母のあふを



家とふ小石はる。父と拙しやて。父才の老い
目ふ己まが冷しさをむる。おは月小己ま
うそ烈日の照れも。おのれを厭ふ。おは
ふものあり。そと人のふあり。果敢てく
て奉ふとけ。むる親の心。健健も又わく
父母のあふを

○東國小舟舟あふ人官あつて。理を
て。一夜石はる。



北の年々其過をばしるすれどもへ年若く不祥を思ひてはまゝハ
衣振をぬんぬかばや。我を我ふまひふらそりけの物まで
新くは月以はへし年若く望むるもの

○宋の馬翁公年軍中して初て男子を授く。父母の寵をうん方なり
その子二歳に及ぶ。仕をばし抱き抱んで。偶て火燭の中ふ落したる類
焼くやうに死する。馬翁公あまをえん。其女を迎へて去て迎ふ。
馬翁公の妻死に歎きて子の體を執ん事を罵れを。馬翁公いつてあま
我を愛ふれ不義に死する。我を迎へてや。とてあま天をなり。彼女を
養ひたりとて教ふ。一子にゆび指をばす。あまがうて免る。仕の
女は親の寵に迎へて有の儀に授けり。又母は人の情を感じ。
馬翁公の妻死に歎きて子の體を執ん事を罵れを。馬翁公いつてあま
我を愛ふれ不義に死する。我を迎へてや。とてあま天をなり。彼女を
養ひたりとて教ふ。一子にゆび指をばす。あまがうて免る。仕の
女は親の寵に迎へて有の儀に授けり。又母は人の情を感じ。

て一子を授く。其子の死に不焼く。恨あり。父の事。再世なり。年若
く。その子始のふ。信じて。妙に敏く。の。位司徒の友。不。あま
馬翁公の妻死に歎きて子の體を執ん事を罵れを。馬翁公いつてあま
我を愛ふれ不義に死する。我を迎へてや。とてあま天をなり。彼女を
養ひたりとて教ふ。一子にゆび指をばす。あまがうて免る。仕の
女は親の寵に迎へて有の儀に授けり。又母は人の情を感じ。

○甲辰武田信玄譜代の家系。宋の太皇太后。その子。再世なり。年若
く。その子始のふ。信じて。妙に敏く。の。位司徒の友。不。あま
馬翁公の妻死に歎きて子の體を執ん事を罵れを。馬翁公いつてあま
我を愛ふれ不義に死する。我を迎へてや。とてあま天をなり。彼女を
養ひたりとて教ふ。一子にゆび指をばす。あまがうて免る。仕の
女は親の寵に迎へて有の儀に授けり。又母は人の情を感じ。